

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	一念の椿
Author(s)	地橙孫
Citation	龍南會雜誌, 158: 176-176
Issue date	1915-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6512
Right	

國亡び黄なる花咲く高原を驢にして行けば月さしのぼる。
歡樂の酒にひたりて歌ふ夜の更くればかなし孤兒のごと。
孔孟の教は讀めぞ大いなるわが哀しみのやりどころなし。

一念の椿

地 橙 孫

少年の朝の挨拶木蓮に帽ふるゝ。
額の上押しつけし木蓮の息吹より。
牛濡れし毛並にうつる花となり。

朝々子心に咲き念じたる椿かな。
うなじ、椿をちぬ人身を忘れん。

酒瓶に人の手をつげざる春の風。

ひばり地をはなれて仰ぐべき我はなかりけり。
なにとなくむしるげんげに光かな。
ありあまるげんげを己がまゝにつめ。

心の沼の芦の芽のみな日に向けり。
わが向日葵 朝よりの花におろがみぬ。